

最蓮房御返事

文永九年四月一三日 五一歳

御札の旨委細承り候^{おわ}ひ畢^{たし}んぬ。都よりの種々の物慥^たかに給^たひ候^たひ畢^たんぬ。鎌倉に候^たひし時こそ常にかゝる物は見候^たひつれ。此の島に流罪せられし後は未だ見^たず候^た。是^た体の物^たは辺土の小島にてはよによに目出度^たき事に思^たひ候^た。

御状に云はく、去ぬる二月の始めより御弟子となり、帰伏仕^たり候^た上は、自今以後は人数^{ひとかず}ならず候^たとも、御弟子の一分と思^たし食^たされ候^たはゞ、恐^た悦^たに相存^たずべく候^た云云。経の文には「在々諸^た仏の土に、常に師^{とも}と俱^{とも}に生まれん」とも、或は「若^たし法師^{しんごん}に親近^{すみ}せば速^たやかに菩薩^たの道を得^たん。是^たの師^たに随順^たして学^たせば恒^た沙^たの仏^たを見^たてまつることを得^たん」とも云^たへり。釈^たには「本^た此^たの仏^たに従^たつて初^ためて道^た心を発^たこし、亦^た此^たの仏^たに従^たつて不^た退^た地に住^たせん」とも、或^たは云^たはく「此^たの仏^た菩薩^たに従^たつて結^た縁^たし、還^たつて此^たの仏^た菩薩^たに於^たて成^た就^たす」とも云^たへり。此^たの経^た釈^たを案^たずるに、過^た去^た無^た量^た劫^たより已^た来^た師^た弟^たの契^た約^た有^たりしか。我^た等^た末^た法^た濁^た世^たに於^たて生^たを南^た閻^た浮^た提^た大^た日本^た国^たにうけ、忝^たくも諸^た仏^た出^た世^たの本^た懐^たたる南^た無^た妙^た法^た蓮^た華^た経^たを口^たに唱^たへ心^たに信^たじ身^たに持^たち手^たに翫^たぶ事^た、是^た偏^たに過^た去^たの宿^た習^たなるか。

予^よ日本^たの体^たを見るに、第六^た天^たの魔^た王^た智^た者^たの身^たに入りて、正^た師^たを邪^た師^たとなし善^た師^たを惡^た師^たとなす。経^たに「惡^た鬼^た其^たの身^たに入^たる」とは是^たなり。日^た蓮^た智^た者^たに非^たずと雖^たも、第六^た天^たの魔^た王^た我^たが身^たに入^たらんとするに、兼^たねての用^た心^た深^たければ身^たによせつけず。故^たに天^た魔^た力^た及^たばずして、王^た臣^たを始^ためとして、良^た觀^た等^たの愚^た癡^たの法^た師^た原^たに取り付^たひて日^た蓮^たをあだむなり。然^たるに今^た時^たは師^たに於^たて正^た師^た・邪^た師^た・善^た師^た・惡^た師^たの不同^たある事^たを知^たつて、邪^た惡^たの師^たを遠^た離^たし、正^た善^たの師^たに親^た近^たすべきなり。設^たひ德^たは四^た海^たに齊^たしく、智^た慧^たは日^た月^たに同^たじくとも、法^た華^た経^たを誹^た謗^たするの師^たをば惡^た師^た・邪^た師^たと知^たつて、是^たに親^た近^たすべからざる者^たなり。或^た経^たに云^たはく「若^たし誹^た謗^たの者^たには共^たに住^たすべからず、若^たし親^た近^たし共^たに住^たせば即^たち阿^た鼻^た獄^たに趣^たかん」と禁^ため給^たふ是^たなり。いかに我^たが身^たは正^た直^たにして、世^た間^た出^た世^たの賢^た人^たの名^たをとらんと存^たずれども、惡^た人^たに親^た近^たすれば、自^た然^たに十^た度^たに二^た度^た三^た度^た其^たの教^たへに随^たひ以^たて行^たくほどに、終^たに惡^た人^たになるなり。釈^たに云^たはく「若^たし人^た本^た惡^た無^たきも、惡^た人^たに親^た近^たすれば後^た必^たず惡^た人^たと成^たり、惡^た名^た天^た下^たに遍^たからん」云云。所^た詮^た其^たの邪^た惡^たの師^たとは今^たの世^たの法^た華^た誹^た謗^たの法^た師^たなり。涅槃^た経^たに云^たはく「菩^た薩^た、惡^た象^た等^たに於^たては心^たに恐^た怖^たすること無^たかれ、惡^た知^た識^たに於^たては怖^た畏^たの心^たを生^たぜよ。惡^た象^たの為^たに殺^たされては三^た趣^たに至^たらず、惡^た友^たの為^たに殺^たされては必^たず三^た趣^たに至^たらん」と。法^た華^た経^たに云^たはく「惡^た世^たの中^たの比^た丘^たは邪^た智^たにして心^た諂^た曲^たに」等^た云云。先^た々^た申^たし候^た如^たく、善^た無^た畏^た・金^た剛^た智^た・達^た磨^た・慧^た可^た・善^た導^た・法^た然^た、東^た寺^たの弘^た法^た、園^た城^た寺^たの智^た証^た、山^た門^たの慈^た覺^た、關^た東^たの良^た觀^た等^たの諸^た師^たは、今^た経^たの「正^た直^た捨^た方^た便^た」の金^た言^たを讀^たみ候^たには「正^た直^た捨^た實^た教^た但^た說^た方^た便^た教^た」と讀^たみ、或^たは「於^た諸^た經^た中^た最^た在^た其^た上^た」の經^た文^たをば「於^た諸^た經^た中^た最^た在^た其^た下^た」と、或^たは「法^た華^た最^た第^た一^た」の經^た文^たをば「法^た華^た最^た第^た二^た第^た三^た」と讀^たむ。故^たに此^た等^たの法^た師^た原^たを邪^た惡^たの師^たと申^たし候^たなり。

さて正善の師と申すは、釈尊の金言の如く、諸経は方便、法華は眞実と正直に読むを申すべく候なり。華嚴の七十七の入法界品之を見るべし云云。法華經に云はく「善知識は是大因縁なり。所謂化導して仏を見たてまつり阿耨菩提を發こすことを得せしむ」等云云。仏説の如きは、正直に四味・三教・小乘・權大乘の方便の諸経、念仏・眞言・禪・律等の諸宗並びに所依の経を捨て、但唯以一大事因縁の妙法蓮華經を説く師を正師・善師とは申すべきなり。然るに日蓮末法の初めの五百年に生を日域に受け、如来の記文の如く三類の強敵を蒙り、種々の災難に相値ひて、身命を惜しまずして南無妙法蓮華經と唱へ候は正師か邪師か。能く能く御思惟之有るべく候。上に挙ぐる所の諸宗の人々は我こそ法華經の意を得て法華經を修行する者よと名乗り候へども、予が如く弘長には伊豆国に流され、文永には佐渡島に流され、或は竜口の頸の座等、此の外種々の難は数を知らず。經文の如くならば予は正師なり善師なり。諸宗の学者は悉く邪師なり悪師なりと覺し食し候へ。此の外善悪二師を分別する經論の文等は広く候へども、兼ねて御存知の上は申すに及ばず候。

只今の御文に自今以後は日比の邪師を捨て偏に正師と憑むとの仰せは不審に覺へ候。我等が本師釈迦如来法華經を説かんが爲に出世ましませしには、他方の仏菩薩等來臨影響して釈尊の行化を助け給ふ。されば釈迦・多宝・十方の諸仏等の御使ひとして來たつて化を日域に示し給ふにもやあるらん。經に云はく「我於余国遣化人、爲其集聽法衆、亦遣化、隨順不逆」と。此の經文に比丘と申すは貴辺の事なり。其の故は聞法信受、隨順不逆、眼前なり。争でか之を疑ひ奉るべきや。設ひ又「在々諸仏土、常与師俱生」の人なりとも、三周の聲聞の如く下種の後に退大取小して五道六道に沈輪し給ひしが、成仏の期來至して順次に得脱せしむべきゆへにや。念仏・眞言等の邪法・邪師を捨て、日蓮が弟子となり給ふらん、有り難き事なり。何れの辺に付いても、予が如く諸宗の謗法を責め彼等をして捨邪歸正せしめ給ふて、順次に三仏座を並べ常寂光土に詣りて、釈迦・多宝の御宝前に於て、我等無始より已來師弟の契約有りけるか、無かりけるか。又釈尊の御使ひとして來たりて化し給へるか、さぞと仰せを蒙りてこそ我が心にも知られ候はんずれ。何様にもはげませ給へ、はげませ給へ。

何となくとも貴辺に去ぬる二月の比より大事の法門を教へ奉りぬ。結句は卯月八日夜半寅の時に妙法の本円戒を以て受職灌頂せしめ奉る者なり。此の受職を得るの人争でか現在なりとも妙覺の仏を成ぜざらん。若し今生妙覺ならば後生豈等覺等の因分ならんや。実に無始曠劫の契約、常与師俱生の理ならば、日蓮今度成仏せんに貴辺豈相離れて惡趣に墮在したまふべきや。如来の記文・仏意の辺に於ては世出世に就きて更に妄語無し。然るに法華經には「我が滅後の後に於て心に斯の經を受持すべし。是の人仏道に於て決定して疑ひ有ること無けん」と。或は「速やかに爲れ疾く無上仏道を得たり」等云云。此の記文虚しくして我等が成仏今度虚言ならば、諸仏の御舌もきれ、多宝の塔も破れ落ち、二仏並座は無間地獄の熱鉄の床となり、方・実・寂の三土は地・餓・畜の三道と

変じ候べし。争いでかざる事候べきや。あらたのもしやたのもしや。

是の如く思いつゞけ候へば、我等は流人なれども身心共にうれしく候なり。大事の法門をば昼夜に沙汰し、成仏の理をば時々刻々にあぢはう。是くの如く過ぎ行き候へば、年月を送れども久しからず、過すぐる時刻も程あらず。例せば釈迦・多宝の二仏塔中に並座びょうざして、法華の妙理をうなずき合ひ給ひし時、五十小劫仏の神力の故に諸の大衆をして半日の如しと謂おもはしむと云ひしが如くなり。劫初より以来、父母・主君等の御勘氣を蒙り遠国の島に流罪せらるゝの人、我等が如く悦び身に余りたる者よもあらじ。されば我等が居住して一乗を修行せんの処は何れの処にても候へ、常寂光の都たるべし。我等が弟子檀那とならん人は一步を行かずして天竺の靈山を見、本有ほんぬの寂光土へ昼夜に往復し給ふ事、うれしとも申す計り無し、申す計り無し。

余りにうれしく候へば契約一つ申し候はん。貴辺の御勘氣と疾く疾く許させ給ひて都へ御上り候はゞ、日蓮も鎌倉殿はゆるさじとの給ひ候とも諸天等に申して鎌倉に帰り、京都おとずれへ音信申すべく候。又日蓮先立ち許てゆり候ひて鎌倉へ帰り候はゞ、貴辺をも天に申しこきょうて古京へ歸し奉るべく候。恐々謹言。

四月十三日

日 蓮 花 押

最蓮房御返事

夕さりは相構へ相構へて御入り候へ。得受とくじゆしよくにん職人功德法門くわ委しく御申し候はん。